

竺法護訳『正法華経』の〈会三帰一偈〉

白 景皓

0 はじめに

『法華経』「方便品第二」の後半に位置付けられる〈会三帰一偈〉(42-54 偈)は『法華経』の一乗思想を詳述する重頌であり、三乗から一乗への統合(会三帰一¹)を主旨とする部分である。〈会三帰一偈〉に相当する漢訳及び品名を年代順に挙げれば以下の通りである。

- 『正法華経』「善権品第二」(竺法護訳、286 CE)
- 『妙法蓮華経』「方便品第二」(鳩摩羅什訳、406 CE)
- 『添品妙法蓮華経』「方便品第二」(闍那崛多共笈多訳、601 CE)

本稿はこれらのうち竺法護訳『正法華経』に焦点を当てる。竺法護は西晋期(265-314 CE)において訳経事業を遂行した。竺法護訳は「古訳」に属する。彼の時代においては仏教術語が未だ漢語化されておらず、仏教思想を中国の文化風土に受容せしめるための特別の工夫が求められた。結果、彼の翻訳は難読の言葉や文句に満ちることとなった。白[2017]は既に竺法護の散文訳の特徴を考察した。しかしながら、竺法護の韻文訳の特徴についての研究は全くの手付かずである。よって、本稿は、『正法華経』「善権品」の〈会三帰一偈〉を取り上げ、竺法護の韻文の訳風及び韻文訳の特徴を明らかにすることを目的とする。併せて『正法華経』「善権品」の〈会三帰一偈〉の書き下し文及び現代語訳を提示する。なお、参考までに、対応するサンスクリット原典とその岩本訳、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』及び国訳『妙法蓮華経』(坂本訳)を併せ提示することとする。

1 西晋中期の文芸思潮と竺法護の訳風

清宮[2006: 57]は、僅か五十年間の西晋期に「自然」を特徴とする道家思想は士人達の詩賦という文学形態の中に影を潜めるようになったとする。「自然」という言葉は、元来「ありのまま」の意味である。西晋中期(280-289 CE)に至り、文学者である左思は『三都賦序』において、詩頌は真実に基づいて物事を賛美するものであるとし、次のように述べる。

發言為詩者。頌其所見也。美物者貴依其本。讚事者宜本其實也。^[1]

さらに、左思と同時代に成立した『文章流別論』(摯虞撰²)も同趣旨のことを述べている。

^[1]書き下し:「言を發して詩を為る者は、其の見る所を頌うなり。物を美むる者は、其の本に依るを貴ぶ。事を讚むる者は、宜しく其の實に本づくべきなり。」

¹「会三帰一」という語は『法華義記』(法雲撰)に初出する。

T33.582b27-28:「但法華所明正言無二無三。會三歸一。」(但、『法華』の明かす所の正言は「二も無く、三も無し」にして、三を會して一に歸す。)

法雲は、余の乗り物がなく、唯一つの乗り物があるという内容を記述する部分が「会三帰一」に相当すると解釈する。

²『文章流別論』(摯虞撰)の断片は『藝文類聚』(歐陽詢撰)に回収されている。

夫假象過大、則與類相遠。逸辭過壯、則與事相違。辯言過理、則與義相失。麗靡過美、則與情相悖。^[2]

『文章流別論』（摯虞撰）は、「賦の誇大なる表現を戒めるべきである」と論じ、繁多の修辞技法によって作られる賦は真意を失い（與義相失）、真情と相反する（與情相悖）とする。

このように西晋中期の士人達を代表する左思及び摯虞は共に「写実精神」を重視する。この「写実精神」は同時代の竺法護³にも影響を与えたと考えられる。『高僧伝』（慧皎撰）は竺法護の訳風を次のように評価する。

凡所譯經。雖不辯妙婉顯、而宏達欣暢。特善無生。依慧不文。朴則近本。^[3]

精美でないにも拘らず、サンスクリット原典に忠実、素朴。これが竺法護訳の訳風に対する評価である。これを竺法護の「写実精神」への評価と考えることができよう。

2 竺法護の韻文訳の特徴と〈会三帰一偈〉

白 [2017: 127-129] は竺法護の散文訳の特徴として以下の点を明らかにした。

- ①同一經典内での同一語の訳し分け
- ②四字句による構文
- ③類義語を重ねた二字の造語
- ④補填訳
- ⑤倒置法

竺法護の韻文訳には散文訳の特徴である③類義語を重ねた二字の造語、④補填訳、⑤倒置法も共通に見出される。さらに韻文訳に固有な特徴として、仏教用語の誤訳及び五言四句と四言八句の韻律の使用が指摘できる。以下にこれらの韻文訳の特徴を具体例に沿って説明する。

2.1 類義語を重ねた二字の造語

以下のものが類義語を重ねた二字の造語である。

- (1) 「覚了」（＝「覚悟」 - 「了知」（悟ってわかる））⁴
- (2) 「瑕穢」（＝「瑕疵」 - 「汚穢」（有漏・染汚））⁵
- (3) 「造立」（＝「造作」 - 「建立」（作り出す））⁶

^[2]書き下し：「夫れ假象大に過ぎれば、則ち類と相遠す。逸辭壯に過ぎれば、則ち事と相違う。辯言理に過ぎれば、則ち義と相失う。麗靡美に過ぎれば、則ち情と相悖る。」

^[3]T50.327a09-10：「凡そ譯する所の經は、辯妙婉顯ならずと雖も、宏達して欣暢なり。特に無生を善くし、慧に依りて文ならず。朴なれば則ち本に近し。」

³河野 [2006: 75-77] によれば、竺法護の訳経事業は四十八年に亘っているという。『無尽意經』が訳出された太始元年（265 CE）から『大浄法門經』が訳出された建興元年（313 CE）まではほぼ西晋期と重なっている。『正法華經』は西晋中期の286年に訳出されたのである。

⁴3.1の42頌を参照せよ。

⁵3.1の44頌を参照せよ。

⁶3.2の46頌を参照せよ。

- (4) 「勸化」 (= 「勸進」 - 「開化」 (勧めて教化する))⁷
 (5) 「患厭」 (= 「苦患」 - 「憎厭」 (苦しみと怨み))⁸
 (6) 「仁楽」 (= 「仁愛」 - 「好楽」 (親しんで楽しむ))⁹
 (7) 「翫習」 (= 「翫味」 - 「学習」 (味わって習う))¹⁰

2.2 補填訳

竺法護は、韻律上の制約からサンスクリット韻文の一部を省略して翻訳せず、略訳した後の文脈の不自然さを回避するために自分の理解を補填訳として添加する。例を挙げる。

	隨	人心	行	而為說法	
	yathā	āśaya	carim		(43a)
	罪福 (之)	事	若干不同		
(1)	從其宿世各得	karmāni	citrāni		(43b)
	purākṛtaṃ	報應			(43d)
	此	諸眾生	心各各異		
	iha	prāṇakoṭiṇām	nānādhimuktān		(43c)
	欲知佛道	常	調清淨		
		sadā	viśuddhā		(50a)
	仁樂	聖典	實為	要妙	
(2)	śucī			sūrata	(50b)
	在諸佛所	所作已辦			
	bahubuddhakoṭiṣu	kṛtādhikārā			(50c)
	故為斯類	說	方等經		
	teṣāṃ	vadāmi	vaipūlyasūtrāṇi		(50d)
	其有	逮聞	無極	聖教	
	yehi	śrutam	agryam	śāsanam	(53b)
	斯等 (乃為)	佛之	弟子		
(3)	ime te	nāyakasya	śrāvaka		(53a)
	假使	得聽	佛	一偈者	
	api	śruta		ekā gāthā	(53c)
	皆成正覺	終無有疑			
	sarveṣa bodhāya	na saṃśayo `sti			(53d)

第 43 偈、第 50 偈及び第 53 偈は KN・WT 本に近い¹¹。43a の jāniya, te, ca、43c の viditva, teṣāṃ、43d の yat, kuśalaṃ, ca, tehi、50a の bhavanti, ye, ceha、50b の vyaktā, buddhaputrāḥ、53a の ca、53b の etam、53c の dhāritā, vā の翻訳が省略されている。

⁷3.2 の 47 頌を参照せよ。

⁸3.2 の 48 頌を参照せよ。

⁹3.3 の 50 頌を参照せよ。

¹⁰3.3 の 52 頌を参照せよ。

¹¹3.1 及び 3.3 を参照せよ。

河野 [2006: 273–284] によれば、竺法護訳には「難解な教理部分の不翻訳」の特徴があるとされる。しかしながら、上記の二偈の省略内容から見れば、難解な教理部分とすることはできない。韻律制限を考慮し、重要視しない諸語を翻訳していないと考えられる。

第43偈における「而為說法」、「罪福」及び「報應」という語、第50偈における「欲知佛道」、「聖典」及び「實為」という語、第53偈における「佛」という語が竺法護自身の理解に基づく文脈を整えるための補填である。

2.3 倒置法

倒置法に関しては以下の三例を挙げることができる。

- (1) 「為説若干教 善權方便 億百千姪」(「爲に教えを説きたもう。善權方便の億百千姪をもてす」)(=「億百千姪 善權方便 為説若干教」(億百千姪の善權方便をもて、爲に教えを説きたもう))¹²
- (2) 「聖可分別 爲衆生故」(「聖は分別すべく、衆生の爲の故なり」)(=「聖可爲衆生分別故」(聖は衆生の爲に分別すべきが故なり))¹³
- (3) 「行能具足」(「行いをも具足すること能う」)(=「能具足行」(行い具足すること能う))¹⁴

2.4 仏教用語の誤読

<会三帰一偈>の第45、47、49偈¹⁵において、竺法護が仏教用語を一般用語として誤読する事例を以下のとおり指摘できる。

- (1) 「所言至誠」
KN・WT・TH本：adbhuta (45b)
鳩摩羅什訳：「未曾有」
- (2) 「從始引喻」
TH本：nidāna aupamyā (45c)
鳩摩羅什訳：「因縁」、「譬喩」
- (3) 「如有所説」
KN・WT・TH本：tathopadeśān (45d)
鳩摩羅什訳：「優波提舍經」
- (4) 「大聖所興」
KN・WT・TH本：svayambhūr (47a)
鳩摩羅什訳：「我」(=「仏」)
- (5) 「諸新學者」
KN・WT・TH本：navāṅgam (49a)
鳩摩羅什訳：「九部法」

これらのうち特に目を引くのは「大聖所興」と「諸新學者」である。「大聖所興」は仏の尊称である svayambhū (自存者) の誤読である。「諸新學者」は navāṅgam に対応する。第45偈は「九分

¹²3.1 の 42 頌を参照せよ。

¹³3.2 の 49 頌を参照せよ。

¹⁴3.3 の 51 頌を参照せよ。

¹⁵3.1 及び 3.2 を参照せよ。

教」(navāṅgam) に含まれる項目を提示し、第 49 偈は「九分教」(navāṅgam) という用語を使用している。しかし竺法護は、この仏教用語を一般用語として理解し、nava（「九」「新」）を「新」と解し、navāṅga を「諸新學者」と誤読した。

2.5 五言四句と四言八句の韻律

竺法護はサンスクリット散文を四字句構文をもって訳す¹⁶。これに対して彼はサンスクリット偈頌の śloka 韻律を五言四句で訳し、triṣṭubh-jagatī 韻律を四言八句で訳する¹⁷。しかしながら、〈会三帰一偈〉の 42 頌はサンスクリット偈頌が triṣṭubh-jagatī 韻律であるのにもかかわらず、五言四句・四言二句の混淆となっている。

2.5.1 〈会三帰一偈〉の韻律

〈会三帰一偈〉(42–54 頌) および前後諸偈(38–41 頌、55–145 頌) のサンスクリット原典(KN, WT, TH 本)における韻律の形式と対応する竺法護訳の偈頌韻律、鳩摩羅什訳の偈頌韻律の形式は以下の表のようにまとめられる。

偈頌名	偈頌数	偈頌韻律	竺法護訳の偈頌韻律	鳩摩羅什訳の偈頌韻律
〈五千起去偈〉	38–41 頌	śloka	五言四句	五言四句
〈会三帰一偈〉	42 頌	triṣṭubh-jagatī	五言四句・四言二句の混淆	五言四句・五言六句の混淆
	43–54 頌	triṣṭubh-jagatī	四言八句	五言四句・五言六句の混淆
〈開三頭一偈〉	55–70 頌	triṣṭubh-jagatī	四言八句	五言四句・五言六句の混淆
〈唯説一乗偈〉	71–134 頌	triṣṭubh-jagatī	四言八句	五言四句・五言六句の混淆
〈意趣難解偈〉	135–145 頌	triṣṭubh-jagatī	四言八句	五言四句・五言六句の混淆

表から明らかのように、〈五千起去偈〉(38–41 頌) の韻律は śloka¹⁸であり、対応する竺法護訳及び鳩摩羅什訳の偈頌韻律は五言四句¹⁹である。〈会三帰一偈〉(42–54 頌) 及びその後の諸偈(55–145 頌) の韻律は triṣṭubh-jagatī²⁰である。これに対する韻律は、鳩摩羅什の場合統一的に五言四句・五言六句の混淆²¹であるのに対して、竺法護の場合は 42 頌の韻律が五言四句・四言二句の混淆²²、43–54 頌及び後の 54–145 頌の韻律が四言八句²³となっている。42 頌の韻律が五言四句・四言二句の混淆とされたのは、竺法護が〈会三帰一偈〉の 42 頌を韻律の転換点であることに留意したからであると思われる。

矢田 [2007: 30; 31] によれば、五言詩は俳優や楽人などの間で歌われた民間歌謡に由来する通俗的な詩形ではあるが、流れるように伸びやかな美しさを備え、四言詩は『詩経』に由来する典雅さを備えた「正体」と言うべき詩形であり、字数の少ない句に充実した内容が盛り込まれることを理想とする。これらの点を考慮すれば、鳩摩羅什は読誦や暗誦の便を配慮した上で五言を採用し、竺法護は、教養人にせよ一般人にせよ、彼らに『法華経』の内容を理解させることを主眼として通俗と典雅を兼備する五言四句と四言八句を採用したとすることができよう。

¹⁶白 [2017: 127] を見よ。

¹⁷辛嶋 [2004: 13] を見よ。

¹⁸śloka は一句八音節、四句からなる韻律である。

¹⁹五言四句は一句五文字、四句からなる韻律である。

²⁰triṣṭubh-jagatī は一句十一音節、あるいは十二音節、四句からなる韻律である。

²¹五言四句・五言六句の混淆は一句五文字、四句及び一句五文字、六句からなる混淆の韻律である。

²²五言四句・四言二句の混淆は一句五文字、四句及び一句四文字、二句からなる混淆の韻律である。

²³四言八句は一句四文字、八句からなる韻律である。

2.5.2 <会三帰一偈>のリズム

次に、リズムの観点から<会三帰一偈>を分析しよう。矢田[1995: 2-3]は四言詩及び五言詩それぞれのリズムの特徴を次のように指摘している。

【四言詩】

原則として、一句の第二字・第四字がリズムの強調点となり、一首全体の拍節のリズムとしては、「○○|○○、○○|○○、……」という二字一拍の二拍子が基調となる。

【五言詩】

原則として、一句の第二字・第五字がリズムの強調点となり、まず上下に「○○|○○○」と二分され、下の三字はより小さなリズムの強調点（第四字）によって、さらに「○○|○」に細分される。句末の第五字のあとに一字分（1/2拍）の休音が入るため、一首全体の拍節のリズムとしては、「○○|○○|○×、○○|○○|○×、……」という三拍子が基調となる。

竺法護が訳出した<会三帰一偈>には上記の原則と相違するものが数例ある。

①第四十三偈²⁴

隨人心行	而爲說法	○○ ○○、○○ ○○
罪福之事	若干不同	○○ ○○、○○ ○○
從其宿世	各得報應	○○ ○○、○○ ○○
此諸衆生	心各各異	○○ ○○、○ ○○○

「各各異」は *nānā*-と対応している。

②第四十六偈²⁵

其有不樂	正覺明者	○○ ○○、○○○ ○
於無數佛	不造立行	○ ○○○、○○○ ○
愚癡生死	甚多苦患	○○ ○○、○○ ○○
故爲斯等	現說泥洹	○○ ○○、○○ ○○

「正覺明」は *vidvasū* と²⁶、「無數佛」は *bahubuddhakoṭi* と、「不造立」は *acīṇacaryā* と対応している。

③第四十七偈²⁷

大聖所興	行權方便	○○ ○○、○ ○○○
因勸化人	使入佛慧	○○○ ○、○○ ○○
如佛道教	興顯于世	○○ ○○、○○ ○○
吾始未曾	爲若等現	○○ ○○、○○○ ○

「權方便」は *upāyam* と、「因勸化」は *prabodhanārtham* と、「爲若等」は *yuṣme* と対応している。

これらの事例において、竺法護は、三字からなる語彙によってサンスクリット語を翻訳するため、四言詩の「二字一拍」の原則を守ることができず、「三字一拍」の二拍子を使用せざるを得なくなっている。このリズムは四言詩の韻律を乱す。このために、白[2017: 126]が指摘したように、竺法護の韻文訳は竺法護とほぼ同時代の沙門于法蘭によって整然としていないと批評されることとなった²⁸。

²⁴3.1を参照せよ。

²⁵3.2を参照せよ。

²⁶3.2の誤写に関する脚注を参照せよ。

²⁷3.2を参照せよ。

²⁸于法蘭は『法苑珠林』『沙門于法蘭伝』において竺法護の訳風を次のように評している。

「於時經典新譯。梵語數多。辭句繁蕪。章偈不整。」(T53.765a04-05:「時に於いて、經典の新譯に梵語

3 竺法護訳『正法華経』「善権品」の〈会三帰一偈〉の翻訳研究

本節では、『正法華経』（竺法護訳）「善権品」の〈会三帰一偈〉の原文・書き下し・現代語訳を提示する。サンスクリット原典（KN, WT, TH 本）、同原典に基づく岩本訳、『妙法蓮華経』（鳩摩羅什訳）及び国訳『妙法蓮華経』（坂本訳）も併せ提示する。

3.1 善巧方便としての三乗（vv. 42–45）

3.1.1 SP [KN45.1-8; WT41.7-42.3]

śṛṇohi me śārisutā yathaiṣa
 saṃbuddha dharmāḥ puruṣottamehi |
 yathā ca buddhā kathayanti nāyakā
 upāyakausālyasatair anekaiḥ ||42||
 yathāśayaṃ jāniya te carim ca
 nānādhimuktān iha prāṇikoṭinām |
 citrāṇi karmāṇi viditva teṣāṃ
 purākṛtaṃ yat kuśalaṃ ca tehi ||43||
 nānāniruktīhi ca kāraṇehi
 samprāpayāmi¹ ima teṣa prāṇinām |
 hetūhi drṣṭāntaśatehi cāhaṃ
 tathā tathā² toṣayi sarvasattvān ||44||
 sūtrāni bhāṣāmi tathaiva gāthā
 itivṛttakaṃ jātakam adbhutaṃ ca |
 nidāna aupamyasataiś ca citrair
 geyaṃ ca bhāṣāmi tathopadeśāni ||45||³

3.1.2 SP [TH53a5-53b2]

śṛṇohi (me) śārisutā yathaiṣa
 saṃbuddha dharmāṃ puruṣottamena |
 buddhāś ca bhāṣanti yathaiṣa nāyakā
 upāyakausālyasahasrakoṭibhi(h) ||42||
 yathāśayaṃ jāniya te carim ca
 nānādhimuktān⁴ iha prāṇakoṭinām |
 citrāṇi karmāṇi viditva prāṇinaṃ
 purākṛtaṃ yat kuśalaṃ ca tebhiḥ ||43||
 nānāniruktibahukāraṇebhi

¹samprāpayāmi WT

²tathātathā WT

³KN・WT 本によれば、第四十二偈から韻律が triṣṭubh-jagatī に変わる。

數多くあり、辭句繁蕪にして、章偈整らず。）」

于法蘭によれば、竺法護の翻訳の言葉や文句は雑多であり、サンスクリット音写が残り、散文と韻文は整然としていないとされる。

saṃyojayāmi iti teṣa prāṇinām |
 hetubhir dr̥ṣṭāntasahasrakoṭibhis
 tathā tathā toṣayi sarvasatvān ||44||
 sūtrāṇi bhāṣāmi tathaiva gāthā
 itivṛttakā jātaka adbhutāmś ca |
 nidāna aupamyā bahūn vicitrān
 geyāmś ca bhāṣāmi tathopadeśān ||45||⁴

3.1.3 岩本 [103.9-16]

この教えを仏たちがさとした次第を、シャーリプトラよ、余から聴け。また、幾百の巧妙な手段によって、この世の指導者である仏たちが物語るのを聴け。(四十二)
 汝の志願するところと修行を知り、またこの世における幾千万の人間の種々様々な意向を知り、彼らがかつて積んだ福德と現在の数々の行為を知って、(四十三)
 種々の説明をし根拠を示して、余はこれらの人間をこの教えに到達させよう。また、因縁を語り幾百の例話を用いて、余は人々をそれぞれに満足させよう。(四十四)
 ブッダが語った諸々の言葉と詩頌、過去の出来事、本生譚と奇蹟物語を、因縁譚を、また歌ならびにブッダの示唆を語り、幾百の素晴らしい譬喩を用いよう。(四十五)

3.1.4 『妙法蓮華經』（鳩摩羅什訳）^[4]

舍利弗善聽 諸佛所得法
 無量方便力 而爲衆生説 (四十二)
 衆生心所念 種種所行道
 若干諸欲性 先世善惡業 (四十三)
 佛悉知是已 以諸縁譬喩
 言辭方便力 令一切歡喜 (四十四)
 或説修多羅 伽陀及本事
 本生未曾有 亦説於因縁
 譬喩并祇夜 優波提舍經 (四十五)

[国訳『妙法蓮華經』（坂本訳）]

舍利弗よ、善く聴け。諸佛は得たる所の法を
 無量ほうべんりきの方便力しゅじょうをもって衆生の爲に説きたもう。(四十二)
 衆生の心しゅじょうに念ずる所と種種しゅじょうの行ぎょうずる所の道と
 若干の諸もろもろの欲・性しゅうと先世の善惡ぜんなくの業ごうとを、(四十三)
 佛は悉く是れを知り已りて、諸の縁ひと譬喩ひと
 言辭ごんじと方便力とをもって、一切をして歡喜せしめたもう。(四十四)
 或は修多羅しゅたらと伽陀かだ及び本生と
 本生ほんじょうと未曾有とを説き、亦、因縁と
 譬喩び並びに祇夜ぎやと優波提舍經うぱだいしやきょうとを説きたもう。(四十五)

^[4]T09.07c18-07c27

⁴TH 本によれば、第四十二偈から韻律が triṣṭubh-jagatī に変わる。

3.1.5 『正法華経』（竺法護訳）^[5]

舍利弗聽此 佛爲人中上
 諦覺了諸法 爲說若干教
 善權方便 億百千姪（四十二）
 隨人心行 而爲說法
 罪福之事 若干不同²⁹
 從其宿世 各得報應
 此諸衆生 心各各異（四十三）
 所造衆多 纏綿結縛³⁰
 因縁諸見 億百千姪
 一切品類 瑕穢如是（四十四）
 如來大聖 說此經典
 所言至誠 終無虛欺
 從始引喩 若干無數
 如有所說 尋爲分別（四十五）

【書き下し】

舍利弗よ、此れを聽け。佛、人中上と爲り。
 諦らかに諸法を覺了し、爲に教えを説きたもう。
 善權方便の億百千姪をもてす。（四十二）
 人の心行に隨い、爲に法を説きたもう。
 罪福の事、若干同じからず。
 其の宿世より、各報應を得。
 此の諸の衆生の心各各異なる。（四十三）
 衆多の纏綿結縛を造る所、
 因縁や諸の見、億百千姪ありて、
 一切品類の瑕穢は是くの如し。（四十四）
 如來大聖、此の經典を説きたもう。
 言う所、至誠にして、終に虚欺無し。
 始めより喩の若干無數を引く。
 所説有るが如く、尋に爲に分別したもう。（四十五）

【現代語訳】

舍利弗よ、このことを聴きなさい。仏は人間の中の最高者であり、一切法を明らかに覺り、〔衆生達の〕ために教えを説示する。百千コーティ・ナユタもの巧みな方便を通じて。（四十二）
 〔仏は〕衆生達の意向及び修行に従い、〔彼らの〕ために説法する。衆生達それぞれの悪業や善業は相違し、同一ではない。この衆生達の心はそれぞれ異なる。（四十三）
 数多くの愛欲・煩惱を生み出す、百千コーティ・ナユタもの原因、理由や見解がある。全ての衆生達の有漏・染汚なる〔心〕はそのように〔異なる〕。（四十四）

^[5]T09.70a12-22

²⁹辛嶋 [1998: 352] によれば、「若干」は nānā と対応し、「異なる」の意味である。

³⁰「所造」という訳語は kāraṇa（理由）と対応せず、karaṇa（作るもの）と対応する。竺法護が将来した写本の誤写が反映している。

偉大なる聖人である仏はこの経典（＝『法華経』）を説示する。仏の語る内容は真実であり、決して虚偽なるものではない。〔仏は〕最初〔の説法〕以来、異なる無数の譬喩を用いる。三乗方便（所説）があるかのように、いつも〔衆生達の〕ために説き明かす。（四十五）

3.2 一乗を説く機の到来（vv. 46–49）

3.2.1 SP [KN45.09-46.03; WT42.5-17]

ye bhonti hīnābhiratā avidvasū
 acīrṇacaryā bahubuddhakoṭiṣu |
 saṃsāralagnās ca suduḥkhitās ca
 nirvāṇa teṣāṃ upadarśayāmi ||46||
 upāyam etaṃ kurute svayaṃbhūr
 bauddhasya jñānasya prabodhanārtham |
 na cāpi teṣāṃ pravade kadācid
 yuṣme 'pi buddhā iha loke⁵ bheṣyatha ||47||
 kiṃ kāraṇaṃ kālam avekṣya tāyī
 kṣaṇaṃ ca dṛṣṭvā tatu⁶ paśca bhāṣate |
 so 'yaṃ kṣaṇo adya kathaṃci labdho
 vadāmi yeneha ca bhūtaniścayam ||48||
 navāṅgam etan mama śāsanaṃ ca
 prakāśitaṃ sattvabalābalena |
 upāya eṣo varadasya jñāne
 praveśanārthāya nidarśito me ||49||

3.2.2 SP [TH53b2-54a1]

ye satva hīnābhiratā avidvasā
 acīrṇacaryā bahubuddhakoṭiṣu |
 saṃsāralagnās ca suduḥkhitās ca
 nirvāṇa teṣāṃ upadarśayāmi ||46||
 upāyam etat kurute svayaṃbhur
 boddhasmi yānasmi praveśanārthaṃ |
 na ca tāva 'haṃ teṣa kadāci vyāharī
 yuṣme 'pi buddhā iha loki bheṣyatha ||47||
 kiṃ kāraṇaṃ kālam avekṣya tāyai
 kṣaṇaṃ ca dṛṣṭvā tata paśca bhāṣami |
 so me kṣaṇo hy adya kadāci labdho
 yena vadāmi ima bhūtaniścayam ||48||
 navāṅgakṛtā mahya ihāsti
 śāsane prakāśitaṃ balena |
 upāyam etad varabuddhayāne
 praveśanārthaṃ jinaśāsanesmim ||49||

⁵loki WT

⁶na tu KN

3.2.3 岩本 [103.17; 105.1-9]

幾千万の多くの仏のもとにて修行せず、いやしいことを楽しむ無知の輩に、生死の回転に巻き込まれて苦悩にさいなまれる輩に、余は「さとり」の境地を約束しよう。(四十六)
 仏の智慧をさとらせるために、仏はこの手段を用いる。『汝らも、この世において、仏となろう』とは、いまだかつて語ったことはない。(四十七)
 何故かと言えば、賢聖は時機を待ち、好機を見て、しかる後に語るからだ。いずれにせよ、今日、その好機が来た。そのゆえに、ここで余は真に決定的なことを語ろう。(四十八)
 人々の能力に応じて説かれた余の教誡は、九つの部分に分かたれる。これは余が恩恵を垂れる仏の智慧に入らせるために説いた手段である。(四十九)

3.2.4 『妙法蓮華経』（鳩摩羅什訳）^[6]

鈍根樂小法 貪著於生死
 於諸無量佛 不行深妙道
 衆苦所惱亂 爲是說涅槃（四十六）
 我設是方便 令得入佛慧
 未曾說汝等 當得成佛道（四十七）
 所以未曾說 說時未至故
 今正是其時 決定說大乘（四十八）
 我此九部法 隨順衆生說
 入大乘爲本 以故說是經（四十九）

[国訳『妙法蓮華経』（坂本訳）]

鈍根にして小法を楽しみ、生死に貪著し、
 諸の無量の佛に於いて、深妙の道を行ぜずして、
 衆苦に悩亂せらるる所、是のために涅槃を説きたもう。(四十六)
 我れは、是の方便を設けて、佛慧に入ることを得せしむ。
 未だ曾て汝等は當に佛道を成ずることを得べしとは説かず。(四十七)
 未だ曾て説かざりし所以は、説く時が未だ至らざりしが故なり。
 今は正しく是れ其の時なり。決定して大乘を説かん。(四十八)
 我れ、此の九部の法、衆生に隨順して説くは、
 大乘に入るに本たるをもって、故を以て、是の經を説くなり。(四十九)

3.2.5 『正法華経』（竺法護訳）^[7]

其有不樂 正覺明者³¹
 於無數佛 不造立行
 愚癡生死 甚多苦患

^[6]T09.07c28-08a07

^[7]T09.70a23-70b04

³¹「不樂」という訳語は hīnābhiratā（「いやしいことを楽しむ」と対応せず、hi nābhiratā（「実に楽しまない」と対応する。また、「正覺明」という訳語は avidvasū（「無知の輩」と対応せず、vidvasū（「知ある者」と対応する。この二箇所は竺法護が将来した写本の誤写の反映である。

故爲斯等 現説泥洹（四十六）
 大聖所興 行權方便
 因勸化人 使入佛慧^[8]
 如佛道教 興顯于世
 吾始未曾 爲若等現（四十七）
 何故愚冥 觀於導師³²
 見自患厭 乃爲分別³³
 今乃得聞 演於平等
 以故得説 佛所決了³⁴（四十八）
 於我法教 諸新學者
 佛以聖慧 行權方便
 聖可分別 爲衆生故
 欲開化之 故示此誼（四十九）

【書き下し】

其れ正覺明を樂しまざる者有り。
 無数の佛に於いて、行を造立せず。
 愚癡は生死において、甚だ苦患多し。
 故に斯等の爲に、泥洹を現説したもう。（四十六）
 大聖所興、權方便を行ず。
 人を勸化するに因せて、佛慧に入らしむ。
 『佛の如く、道教をして、世に于いて興顯せしめん』と、
 吾れ始めて未だ曾て、若等の爲に現わさず。（四十七）
 何の故んや。愚冥は導師を觀て、
 自らの患厭を見て、乃ち爲に分別し、
 今乃ち、平等を演ぶることを聞くことを得。
 以ての故に、佛の決了せらる所を説くことを得。（四十八）
 我が法教に於いて、諸の新學者あり。
 佛は、聖慧を以て、權方便を行じたもう。
 聖は分別すべく、衆生の爲の故なり。
 之れを開化せんと欲するが故に、此の誼を示したもう。（四十九）

【現代語訳】

〔仏の〕正等覺を喜ばない者達がいる。〔彼らは〕無数の仏の許において、修行をなしたことがない。愚かな者達は輪廻において、苦しみが甚だ多い。従って、彼らのために、〔仏は〕涅槃を説き明かす。（四十六）

仏は巧みな方便を通じて、人を勧めて教化することにより、人をして仏智に入らしめる。『仏

[8] 「因勸化之」という異説がある。

³² 「愚冥」という訳語は kāla（時機）と対応せず、kāla（「黒い」）と対応する。この箇所は竺法護の訳読の反映である。

³³ 「患厭」という訳語は kṣaṇam（「機」）と対応せず、kṣīṇam（「衰弱」）と対応する。この箇所は竺法護が将来した写本の誤写の反映である。

³⁴ 辛嶋[1998: 245]によれば、「決了」は「決定」の意味であり、niścaya と対応している。

のように教法を世間に発揚するであろう』と、私は最初〔の説法〕以来、未だかつてあなた達に対して語ったことはない。(四十七)

何故かと言えば、愚かな者達は仏を見、自分の欠陥を見出して〔衆会から退去した後、〕〔仏は衆会の残った者達の〕ために〔仏乗の教えを〕説くからである。〔彼らは〕今日、〔三乗は〕平等であると述べる内容を聴聞した。それ故、〔仏は彼らのために〕仏の〔真実なる〕決定内容（＝一乗の教え）を語るができる。(四十八)

私の教法において、諸々の初学者がいる。仏は仏智を通じて、巧みな方便を用いる。仏は〔三乗方便を〕説き明かすであろう、衆生達のために。〔仏は〕彼らを教化しようと望むので、この経典（＝『法華経』）の内容を示す。(四十九)

3.3 一乗のみの説示 (vv. 50–54)

3.3.1 SP [KN46.03-46.12; WT42.18-43.12]

bhavanti ye ceha sadā viśuddhā
 vyaktā śucī sūrata buddhaputrāḥ |
 kṛtādhikārā bahubuddhakoṭiṣu
 vaipulyasūtrāṇi vadāmi teṣāṃ ||50||
 tathā hi te āśayasampadāya
 viśuddharūpāya samanvitā 'bhūn |
 vadāmi tān buddha bhaviṣyatheti
 anāgate 'dhvāni hitānukampakāḥ ||51||
 śrutvā ca prītisphuṭa bhonti sarve
 buddhā bhaviṣyāma jagatpradhānāḥ |
 punaś ca haṃ jāniya teṣa caryāṃ
 vaipulyasūtrāṇi prakāśayāmi ||52||
 ime ca te śrāvaka nāyakasya
 yehi śrutam śāsanam etam agryam |
 ekāpi gāthā śruta dhāritā vā
 sarveṣa bodhāya na saṃśayo 'sti ||53||
 ekaṃ hi yānaṃ dvitīyaṃ na vidyate
 tṛtīyaṃ hi naivāsti kadāci loke |
 anyatrupāyā puruṣottamānāṃ
 yad yānanāntv upadarśayanti ||54||

3.3.2 SP [TH54a1-54b2]

ye bhonti⁷ śuddhāśaya śuddhacittā
 vyaktāḥ śucī sūrata buddhaputrā |
 kṛtādhikārā bahubuddhakoṭiṣu
 vaipulyasūtrāṇi vadāmi teṣāṃ ||50||
 tathā hi te hy āśayasampadāya
 viśuddhaśīlāyavidu |
 teṣāṃ vadāmi bhavabuddha bheṣyatha

⁷tonti は誤写である。bhonti に改める。

anāgate 'dhvani hitānukampakāḥ ||51||
 śrutvā ca prītisphuṭa bhonti⁸ sarve
 buddhā bhaviṣyāma jagatpradhānāḥ |
 punaś ca 'haṃ jāniya teṣa tām cāriṃ
 vaipulyasūtrāṇi prakāśayāmi ||52||
 ime ca te śravaka nāyakasya
 yebhiḥ śrutam śāsana mahyam etat |
 ekā 'pi gāthā śruta dhāritā me
 sarveṣa bodhāya na kiñci saṃśayam ||53||
 ekam hi yānam na dvitīya vidyate
 tṛtīya naivāsti kadāci loke |
 anyatrupāyāt puruṣottamānām
 yaṃ yānanānatv upadarśayāmti ||54||

3.3.3 岩本 [105.10-18; 107.1-3]

そして、余には、常に清浄で学識があり、純粹で温良な仏の息子たちがここにいる。幾千万の多くの仏に仕えた彼らに、広大な教えを説いた經典を余は説こう。(五十)

何故ならば、余は彼らの志願する仏の教えを貯える清らかな形の容器を賦与されているからである。『汝らは未来において人々の幸福をねがい、人々を憐れむ仏になるであろう』と、余は彼らに語る。(五十一)

『汝らはすべて世に勝れた仏となるであろう』と聴き、彼らに喜びの花が開いた。余は彼らの修行を知って、彼らに再び広大な教えを説いた經典を弘めよう。(五十二)

この勝れた教誡を聴いた人々は、仏の弟子である。一詩頌でも、これを聴いて心に留める者はすべて「さとりに」到達すること疑いなし。(五十三)

仏たちが手段として幾つかの乗物を約束する場合を除いて、乗物は実に唯一とつであり、第二の乗物はなく、第三のものも決してこの世にない。(五十四)

3.3.4 『妙法蓮華經』（鳩摩羅什訳）^[9]

有佛子心淨 柔軟亦利根
 無量諸佛所 而行深妙道
 爲此諸佛子 說是大乘經 (五十)
 我記如是人 來世成佛道
 以深心念佛 修持淨戒故 (五十一)
 此等聞得佛 大喜充遍身
 佛知彼心行 故爲說大乘 (五十二)
 聲聞若菩薩 聞我所說法
 乃至於一偈 皆成佛無疑 (五十三)
 十方佛土中 唯有一乘法
 無二亦無三 除佛方便說
 但以假名字 引導於衆生 (五十四)

^[9]T09.08a08-19

⁸tonti は誤写である。bhonti に改める。

[国訳『妙法蓮華経』（坂本訳）]

佛子にして、心淨く、柔軟に、亦た利根にして、
 無量の諸の佛の所にて、深妙の道を行ずるものあり。
 此の諸の佛子の爲に、是の大乗經を説き、（五十）
 我れ、『是くの如き人は來世に佛道を成ぜん』と記するなり。
 深心に佛を念じ、淨戒を修し持つを以つての故に、（五十一）
 此等は、佛を得べしと聞いて、大いなる喜びが身に充遍するとき、
 佛は、彼らの心行を知り、故に爲に大乘を説くなり。（五十二）
 聲聞、若しくは菩薩にして、我が所説の法の
 乃至、一偈を聞かば、皆、成佛せんこと疑い無し。（五十三）
 十方の佛土の中には、唯、一乗の法のみ有りて、
 二も無く、亦、三も無し。佛の方便の説をば除く。
 但、假りの名字のみを以て、衆生を引導するは。（五十四）

3.3.5 『正法華経』（竺法護訳）^[10]

欲知佛道 常調清淨
 仁樂聖典 實爲要妙
 在諸佛所 所作已辦
 故爲斯類 説方等經（五十）
 志性和順 行能具足
 是等勇猛 親近聖教
 則爲彼説 徳最弘衍
 於當來世 慈愍哀傷（五十一）
 一切聞之 欣然諮嗟
 我等成佛 亦當如是
 縁是行故 世世端正
 而當翫習 是方等經（五十二）
 其有逮聞 無極聖教
 斯等乃爲 佛之弟子
 假使得聽 佛一偈者
 皆成正覺 終無有疑（五十三）
 佛道有一 未曾有二
 何況於世 而當有三^[11]
 除人中上 行權方便
 以用乘故 開化説法（五十四）

【書き下し】

佛道を知らんと欲し、常に清淨を調らし、
 聖典を仁樂し、實にして、要妙と爲し、
 諸佛の所に在りて、作る所已に辦めり。

[10] T09.70b04-70b17

[11] 「何況一世」という異説がある。

故に斯くの類の爲に、方等經ほうとうきょうを説きたもう。(五十)

志性ししょう和順わじゆんにして、行ぎやくをも具足ぐそくすること能い、
是等これら勇猛ゆうもうにして、聖教しんぎょうに親近しんこんす。

則ち彼らの爲に、『徳、最も弘衍こうえんなり。

當來とうらいの世よに於いて、慈愍じみんして哀傷あいしやうせん』と説きたもう。(五十一)

一切は之れを聞きて、欣然こんぜんにして諮嗟ししやせり。

『我ら、成佛ぶつせん。亦た當よに是よくの如ごときならん。

是の行ぎやくに縁えんりての故ゆゑに、世世せぜ端正たんじやうならん』と。而も、當よに是よの方等經ほうとうきょうを斷習かんじゅうすべし。(五十二)

其れ無極むごくの聖教しやうきやうを聞きくことを速すみるもの有あれば、

斯等これら乃ち、佛の弟子とと為り。

假使たとい、佛の一偈うを聽きくことを得えれば、

皆みな、正覺しやうかくと成りて、終つひに疑うたがひ有あること無し。(五十三)

佛道ぶつだうは一有いり。未だ曾まて二有ふたらず。

何ぞ況いはんや世よに於いて當よに三有さんらんや。

人にん中ちゆう上じやうは、權方便ごんぽうべんを行いじ、

以て乗のりを用もちいるが故ゆゑに、法ほふを説ときて開化かいけすることを除のぞいては。(五十四)

【現代語訳】

〔ある者達は〕仏乗を知ろうと望み、常に清浄なるものを習い、經典に親しんで楽しみ、誠実であり、温良であり、諸々の仏の許において、なすべきことをすでになした。それ故、〔仏は〕彼らに広大な教を説いた經典を説く。(五十)

〔ある者達は〕志向が和順であり、〔菩薩〕行を具えることができる。彼らは勇猛であり、仏の教に親しんでいる。〔仏は〕彼らに対して、『あなた達の功德は最も広大である。未来世において、〔衆生達に〕慈しみを垂れて哀れむ者（＝仏）となるであろう』と説く。(五十一) 全ての彼らはこのことを聞いた後、『私達もまたそのように成仏できる。この〔菩薩〕行のおかげで、世世において端正な者となるであろう』と喜んで感嘆する。さらに、〔彼らは〕広大な教を説いたこの經典（＝『法華經』）を深く味わって習うであろう。(五十二)

仏の極まりのない教を聴聞できる者達はすなわち、仏の弟子達である。たとえ、仏より、一詩頌でも聴聞すれば、皆成仏できる。〔このことに〕疑いがあるということは決してない。(五十三)

仏乗はただ一つである。未だかつて二つがない。まして、世間において、三つがあることはない。人間の中の最高者（＝仏）が巧みな方便を用い、〔三〕乗を通じて、〔衆生に対して〕説法して教化するという場合を除いては。(五十四)

4 竺法護訳『正法華經』「善權品」の〈会三歸一偈〉に見られる法華經理解

〈会三歸一偈〉(42-54 頌)は『法華經』「方便品」の散文内容を重ねて述べる韻文(重頌)である。本節では竺法護訳〈会三歸一偈〉に見られる竺法護の法華經理解について簡単に触れておきたい。

4.1 真実方便

『法華経』サンスクリット原典の45頌は仏は巧みな方便である九部教を通じて衆生達のために説法することを説く³⁵。対応する竺法護訳は以下の通りである。

如來大聖 説此經典
 所言至誠 終無虛欺
 從始引喻 若干無數
 如有所説 尋爲分別（四十五）³⁶

「所言至誠」（語る内容は真実である）は「未曾有」（adbhuta）の誤訳である。「終無虚欺」（虚偽なるものは決してない）は補填訳であり、サンスクリット原典と対応していない。仏の語る内容は真実であるという点に趣旨を置いている。この竺法護訳は『法華経』「方便品」の次のような散文内容と呼応している。

SP [KN39.9-10]: śraddadhata me śāriputra bhūtavādy aham asmi tathāvādy aham asmi ananyathāvādy aham asmi |

シャーリプトラよ、私を信ぜよ。私は真実を語る者である。私はありのままに真実を語る者である。私は真実でないものを語らない者である。

『正法華経』（竺法護訳）

「爾等當信如來誠諦所説深經。誼甚微妙言輒無虚。」^[12]

SP [KN39.10-12]: durbodhyaṃ śāriputra tathāgatasya saṃdhābhāṣyam | tat kasya hetoḥ | nānāniruktinirdeśābhilāpanirdeśanair mayā śāriputra vividhair upāyakauśalyasatasahasair dharmāḥ saṃprakāśitaḥ |

シャーリプトラよ、悟るのが難しいのは、如来が意趣を持って語られた言葉である。それは何故かといえば、シャーリプトラよ、私は種々の解釈と例示と言語表現と教示を用い、百千の種々の巧みな方便を用い、教えを説き明かすのである。

『正法華経』（竺法護訳）

「若干音聲現諸章句。各各殊別。」^[13]

竺法護訳によれば、仏は最初の説法以来、無数の「喩」（譬喩）を語る。それらは巧みな方便である。仏は「嘘つき」ではなく真実を語る。よって、仏の語る言葉は深い意味を秘めた言葉（saṃdhābhāṣya）として真実を語る言葉でなければならない。竺法護が巧みな方便を真実を語る言葉として理解しようとしていることが窺える。

4.2 方便智=仏智

『法華経』サンスクリット原典の49頌は仏の三乗方便を述べる³⁷。対応する竺法護訳は以下の通りである。

[12]T09.69b26-27: 書き下し: 「爾等、當に如來の誠諦に説く所の深經を信ずべし。誼は甚だ微妙にして、言は輒ち虚しきこと無し。」

[13]T09.69b27-28: 書き下し: 「若干の音聲をもて、諸の章句を現わし、各各殊別なり。」

³⁵3.1.1-3.1.3 を参照せよ。

³⁶3.1.5 を参照せよ。

³⁷3.2.1-3.2.3 を参照せよ。

於我法教 諸新學者
 佛以聖慧 行權方便
 聖可分別 為衆生故
 欲開化之 故示斯誼（四十九）³⁸

「諸新學者」（諸々の初学者がいる）は「九部法」（navāṅgam）の誤訳である。「佛以聖慧」（仏は仏智を通じる）は補填訳であり、サンスクリット原典と対応していないが、『法華経』「方便品」の次のような散文内容と関連している。

SP [KN29.8-9]: svapratyāyān dharmān prakāśayanti vividhopāyakauśalyajñānadarśanahetukāraṇānirdeśānārambaṇaniruktiprajñaptibhis tair upāyakauśalyais tasmīṃs tasmīṃl lagnān sattvān pramo-cayitum |

〔如来達は〕自ら悟った内容である諸々の教えを説き明かすからである。種々の巧みな方便に関する智や直観に基づく原因や理由や比喩や根拠や解釈や〔教理の〕設定を用い、あれこれの巧みな方便を用い、あれこれに執着している衆生達を解脱させる。

『正法華経』（竺法護訳）

「如来觀察人所縁起。善權方便隨誼順導。猗靡現慧各為分別。而散法誼用度群生。」^[14]

SP [KN29.9-30.1]: mahopāyakauśalyajñānadarśanaparamapāramitāprāptāḥ śāriputra tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhāḥ | asaṅgāpratihatajñānadarśanabalavaiśāradyaṅkenidriyabalabodhyāṅgadyānavimokṣasamādhisamāpattiyadbhutadharmasamanvāgatā vividhadharmasamprakāśakāḥ |

シャーリプトラよ、如来・応供・正等覚達は、偉大なる巧みな方便に関する智〔の完成〕及び直観の最高の完成に達した。〔彼らは〕束縛がなく障害がない智や直観を有し、〔十〕力、〔四〕無所畏、〔十八〕不共法、〔五〕根、〔五〕力、〔七〕覚支、〔四〕静慮、〔八〕解脱、〔三〕三昧、〔九〕等至という、未曾有の特質を備え、種々の教えを説き明かす。

『正法華経』（竺法護訳）

「以大智慧力無所畏。一心脱門三昧正受。不可限量。所説經典不可及逮。」^[15]

仏は「巧みな方便に関する智」（方便智）に基づいて、巧みな方便を用い、種々の教えを説き明かす。49 頌の「佛以聖慧 行權方便」は、仏は仏智によって、巧みな方便を用いると記述する。竺法護の散文訳から見れば、「方便に関する智」（方便智）は「大智慧」（偉大なる仏智）に訳されている。竺法護が「巧みな方便に関する智」（方便智）を仏智として理解していることがわかる。

参考文献・略号

(1) 一次資料

SP: *Saddharmapuṇḍarīka*:

(1) KN: Hendrik Kern and Bunyiu Nanjio eds., *Saddharmapuṇḍarīka*. Bibliotheca Buddhica 10. St. Pétersbourg, 1908-1912. Reprint, Osnabrück: Biblio Verlag, 1970.

[14] T09.68a05-07: 書き下し: 「如来は人の縁起する所を觀察し、善權方便をもて、誼に隨いて順導し、猗靡に慧を現わし、各爲に分別したもう。而も法の誼を散らし、用いて群生を度したもう。」

[15] T09.68a07-09: 書き下し: 「大智慧、力、無所畏、一心、脱門、三昧、正受を以て、限量るべからずして、説く所の經典は及逮すべからざる。」

³⁸3.2.5 を参照せよ。

(2) WT: Unrai Wogihara and Chikao Tsuchida, eds., *Saddharmapundarika-sūtram: Romanized and Revised Text of the Bibliotheca Buddhica Publication by Consulting a Skt. MS. & Tibetan and Chinese Translations*. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1934. 3rd ed. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1994.

(3) TH: Toda, Hirofumi, ed., *Saddharmapundarika Central Asian Manuscripts: Romanized Text*. Tokushima: Tokushima Kyoiku Shuppan Center, 1981.

T: 『大正新脩大藏経』

- 欧陽詢〔唐〕
1965 『藝文類聚』上海古籍出版社
左思〔西晋〕
1998 『三都賦』国文学研究資料館

(2) 二次資料

- 岩本裕・坂本幸男
1976 『法華経（中）』岩波文庫
河野訓
2006 『初期漢訳仏典の研究－竺法護を中心として－』皇学館大学出版部
辛嶋静志
1998 『正法華経詞典』創価大学・国際佛教学高等研究所
2004 『佛典漢語詞典』の構想』『中国宗教学文献研究国際シンポジウム報告書』9-15.
清宮剛
2006 「西晋文学と道家思想」『米沢国語国文』35: 57-76.
白景皓
2017 「竺法護訳『正法華経』の〈龍女伝説〉」『比較論理学研究』14: 123-139.
矢田博士
1995 「西晋期における《四言詩》盛行の要因について－「応詔・応令」及び「贈答」の詩を中心に－」『中国詩文論叢』14: 1-23.
2000 「西晋「五言贈答詩」創作時期考」『言語と文化』4: 270-288.
2007 「四言詩と五言詩の特質と盛衰について－先行所説の整理を中心に－」『中国詩文論叢』27: 26-36.

（はく けいこう、広島大学大学院 [インド哲学]）

Hui san gui yi ji 会三歸一偈 (SP II.42–45)
of the *Zheng fa hua jing* 正法華經
by Zhu Fahu 竺法護

Jinghao Bai

A set of verses of the "Skillful Means Chapter" of the *Saddharmapuṇḍarikasūtra* (SP II.42–45), known as 会三歸一偈, expounds the doctrine that the three vehicles are to be united into one. Of this set of verses three Chinese translations are available: by Zhu Fahu 竺法護 in the *Zheng fa hua jing* 正法華經, by Kumārajīva in the *Miao fa lian hua jing* 妙法蓮華經, and by Jñānagupta and Dharmagupta in the *Tian pin miao fa lian hua jing* 添品妙法蓮華經. The earliest translation is that by 竺法護.

Biographies of 竺法護 comment that his translation is more plain and artless than Kumārajīva's. In the Chinese Buddhist tradition the translation of 竺法護 is not highly estimated. 竺法護 flourished in the Western Jin (西晋) period (263–314 CE). It is likely that he was deeply influenced by realism, a literal tendency predominant in his time. Whatever the case may be, however, it is important to note that in his time Buddhist terminology had not been fixed. This is the main reason that he was held low in the Chinese Buddhist tradition. He had to translate the *Saddharmapuṇḍarikasūtra* by employing difficult words and phrases.

The present paper aims at making clear how 竺法護 tries to translate the verses in Sanskrit into Chinese. We may point out the following features in his translation:

1. Words are coined with synonyms;
2. Supplementary expression are used;
3. Inversion is in frequent use;
4. Buddhist terms are mistakenly interpreted;
5. A five-word rhythm and a four-word rhythm are mixed.

Instances pertaining to the features are as follows:

1. 覺了, 造立, 勸化, 患厭 (SP II.42, 46, 47, 48)
2. 隨人心行而為說法 (SP II.43)
3. 行能具足 (SP II.51)
4. 所言至誠, 從始引喻 (SP II.45)
5. 諦覺了諸法 為說若干教
善權方便 億百千姦 (SP II.42)